



(あさい・のぶお) 1935年新潟県生まれ。東京外大卒。読売新聞ワシントン支局長など海外勤務十年以上。米国ジョージタウン大客員研究員、三菱総合研究所客員研究員などを経て87年から現職。著書「アメリカ50州を読む地図」「民族世界地図」ほか。横浜市在住。

■浅井信雄対談シリーズ〈19〉

神戸を近未来の実験都市に

〈ゲスト〉

牧

冬彦

〈神戸商工会議所会頭〉

浅井

信雄

〈神戸市外国語大学教授〉

浅井 地震のときはいかがでした。けがはありませんでしたか。

牧 マンションの十五階なので、よく揺れました。書棚から本が落ちてきて、ひざの高さくらいまで積み重なって、その下から音がするんです。下敷きになったラジカセのスイッチが入ったんですね。それを何とか掘り出して情報を得ました。ペランダに出てみると、王子公園から東灘にかけて煙が六、七本上がっている。まちに出ようとしたのですが、タンスが倒れたり、扉が開かなくなったりしていて着替えを取り出せない。ムートンの数物

を被って寒さをしのぎぼうぜんとしていました。昼ごろ、里親になっていた娘夫婦が西脇から水や食料をかついで駆けつけて来てくれて、これはうれしかったですね。そのうち秘書も来て、話を聞くと、容易ならざる事態だと分かってきました。

浅井 あれから神戸の経済界の先頭に立ってさまざまな努力をされておられますが、いまはどんな思いですか。

牧 これまではみんながむしろに後片付けをして来ましたが、元に戻すのはこれからです。外国の方は神戸を見て、「こんなにも早くきれいになって」と驚かれるが、



(まき・ふゆひこ) 1922年大阪府生まれ。東大法学部卒。48年神戸製鋼所入社。83年から87年まで取締役社長。89年から相談役。87年神戸商工会議所常議員。91年から会頭。趣味囲碁。神戸市中央区在住。

片付けが済んだだけです。問題はこれからですよ。浅井 外から見ると復旧が進んでいるように見えますが、実態は深刻ですね。地震直後は、がんばれば何とかなる、と高ぶった気持ちがありました。いまは、出口が見えない、手詰まり状態だ、と思っている人が多いように感じます。

牧 商工会議所もさまざまな調査を繰り返し行っているのですが、会員の四割は悲観的です。復興が軌道に乗るまでは五年から十年かかるという見通しの経営者が圧倒的多数ですね。

★神戸の被害は国家非常事態だ

浅井 国会もマスコミも関心は住専問題に移っていて、神戸のことはもはや終わったものと考えている。今年の一月十七日前後、マスコミは神戸を集中豪雨のように取り上げたが、一周年が過ぎるとさっと別の問題に移って行く。これはマスコミの癖ですが、情報の継続性が見られないですね。

牧 マスコミというものはそういうもんだと冷たく思わ

なければならぬですね。しかし、政府がマスコミと同じ冷たさでは困る。阪神大震災を国家非常事態だと見るかどうか、これは大切な事だと思っています。テレビの画面から神戸が消えてしまうと、政治家の関心も神戸からそれていく。震災は一地域の問題だとしか意識していない。これだけの大きな被害は国家の非常事態だと認識し、復興策を構想するのは政治を担当する人の任務だと思うのですがね。

浅井 牧さんが一月に大阪で開かれた経団連との会合で「現在になっても政府には非常事態であるとの受け止め方がない」「地元からは、エンタープライズゾーン（自由経済区域）構想や税制上の優遇措置を提案しているのに、政府から、地元がまちをどう復興させようとしているのか見えない」と逆に批判された。これほど悔しい思いはない」と発言された。それが「これほど悔しい思いはない——震災復興で神商会頭が政府批判」という見出しで報道されました。地元には「よくぞはっきり言ってくださった」と評価する人もいるのでは。

牧 政府批判をするつもりではなかったのですが、新聞はそういうふうに取り上げるのが好きなのでしょう。し

かし経団連の豊田章一郎会長は、これからも地元的事情をもっとよく知るようにしよう、とおっしゃり、理解していただいたように思っています。

浅井 政府が「地元からの提案が見えない」と言っていることにはどう答えられますか。

牧 よく「民間企業の顔が見えない」と言われるのですが、企業はそう簡単には立ち上がれない。しかしみんな一生懸命に考えています。三宮や元町のグランドデザインもできあがりつつあります。行政の線引きとは違って、企業はコストを考えながら計画を練り上げて行かなければ



浅井信雄さん

はなりません。もう少し時間を与えてほしいと切実に思っています。

浅井 長田の商店街も仮設でしだいに店ができていきますが、並べてある商品は少ない。買いくる住民がいないからです。つまり商店の開設と住宅建設を同時に進行させなければうまくいかない。

牧 そのとおりです。この間、神戸市商店街連合会の会合でも話したのですが、製造業は工場を作り直してものを作ればマーケットは全国にあるのですから以前と同じように売ることができます。しかし商店街は来てくれる

人がいないと商売にならない。お客さんと呼べるようにするにはどうすればいいのか。いまのようにまちが破壊されたままでは来てくれません。来てもらうためには、商店のみなさんが園を食いしばって一歩前へ出てもらう。昨年のルミナリエではないですけれど、魅力的なイベントも考える。まちに戻ろうという元気を起こさせる。住宅も建てていく。それを同時に進めていくことが大事だと思っていますね。

浅井 中心部のビル再建についても同じことが言えますね。建てても入ってくれる企業があるのか、見通しを立てるのが難しいということがあります。

牧 わたしは、最初に足を踏み出した人が勝ちだ、早くやってほしいといつも言っているのです。

浅井 だれかが一歩踏み出さないと動き出しませんね。牧 わたしの方で分かっているだけでも、コンベンションホールだとかビルだとかデパートだとか、今年建設へ動き出すものが十近くあります。完成は先だとしても、今年中には顔を見せられます。これが市民に与える復興への気持ちは大きいと思いますね。

★ポートアイランドに先端産業を

浅井 スケールの大きな問題に、ポートアイランドの第二期工事があります。大事業ですが、果たして企業が来てくれるのだろうかという疑問が出ていますが、どのようにお考えですか。

牧 はっきりしたものはまだありませんが、例えば神戸市がポートアイランドに考えているKIMEC構想（神戸国際マルチメディア文化都市構想）や郵政省の映像研究所も今年動き出します。これに民間企業がどう参画して行くか、まだ問題がありますが、必ず運動していくだろうと思います。商工会議所が関与している大規模集客産業事業は、いまは凍結されていますが、近く動き出すと思います。タイミングの問題ですね。

浅井 ポートアイランドの第二期造成地について、バブ

ル経済でこれだけ景気が低迷している状態では、地震がなくても買う企業がいたかどうかと言う人がいます。

牧 神戸市はポートアイランドや六甲アイランドを造ってきたが結局破綻してしまっただけではないかとおっしゃる先生がおられますが、わたしは認識不足だと思っっています。もしこれでもなかったら神戸は壊滅していたと言ってもいいと思います。そういう評論をする人は、この二、三十年の神戸の動きを見ずにとんでもない見当違いをしていると思います。

浅井 ポートアイランドを造ったときは、日本経済の景



牧 冬彦さん

気のいい時期でした。企業も出てきた。六甲アイランドのとき、企業の出足がややにぶった。そしてポーターの二期工事ですね。ですから、地震の前から厳しい見通しがあったのでは。

牧 しかし、あれはやめておいて、これで終わりにしておけばよかったのかというと、それでは神戸市の発展の余地はなくなってしまう。ヒンターランドの開発もできていません。六甲山の背後にあれだけの豊かな土地を造り出せたのは島を造ったからなのです。

ヒンターランドのインダストリアルパークに、昨春秋、

米国の薬品会社が工場を建てました。糖尿病の薬を作る工場です。六甲アイランドにも世界の企業が進出しています。そういうように企業を呼び込めるのは神戸に土地があるからなのです。ポテンシャル（潜在能力）があるということが一番の強みです。昔の帯状の神戸のまちは手の打ちようがない。

浅井 神戸はすべてが港の機能と結び付いていると言ってもいいでしょうが、このところ港の機能はアジアの港と激しく競合するようになってきた。それに代わるなにか新しいものが必要だという指摘が出て来ているようですが、どう考えますか。

牧 問題は、港というものは既に十年前から国際競争場裡にさらされていた、そのことの認識がわれわれも港湾管理者も少なかったと言えらると思います。われわれ製造業界は二十年、三十年前から国際競争ということを中心にしてきた。国際競争に勝てるかどうか物が物事を考える基準でした。ところが、港の場合は、ここに港があるから船が入ってくれるのは当たり前だと考えていたところがある。いま港というのはコスト競争力なのです。

もちろん物理的な環境も大事です。中国の港のように海が浅いので浚渫に膨大な費用をかけなければならないところもある。それに比べると神戸は有利です。しかし港のコストは自然環境だけではない。釜山、杭州、香港、シンガポールなどは、神戸の自然環境には負けるかもしれないが、人の面、システムの面、コスト競争では追い越せると公言しています。われわれがこの二十年、三十年苦勞してきた国際港湾としての競争力をどうやって回復していくか、もっとみんなが真剣に考えなければならなと思います。

浅井 港と神戸とのかかわりを見直していくことになる、それは神戸というまちの性格も変わっていく第一歩なのかも知れませんね。

牧 しかし神戸は港をあきらめることはできません。神戸は交通の要衝という利点を捨てたら他には何もありません。いまは関西国際空港と有機的に結合しながら、海の港、

空の港を効果的に使っていかなければならないのです。

ポートアイランドの第二期工事に期待したいのは、先端産業のメディアを取り入れたメディアポートといったものがないかという夢があります。郵政省が神戸の復興にからめてポートアイランドにメディア産業を起こそうと補正予算で八十億円を決めたのは、その将来性に着目したからです。神戸市のKIMEC構想もそういうものを期待しながら立てられています。

浅井 情報通信産業はこれからの時代に大きな可能性を持つ前向きのいいアイデアだと思うのですが、一方でエントラプライズゾーンとか上海・長江プロジェクトとか出てきています。それらがどのように統合されていくのでしょうか。

牧 ポートアイランドのスペースはそれらのものを十分抱え込めるくらいに広さがあります。上海・長江プロジェクトも今年から専門家会議が発足して検討が進められています。息の長い話になりますね。

浅井 中国の政治の安定性や周辺の国々との関係もあるでしょうから。

牧 こちらの都合のいいことばかりを言っている、向こうには向こうの都合もある。互いに共存共栄できる道を求めている、こうという発想でやっていかなければならないと思います。

★国際競争に生き残る実験を神戸で

浅井 神戸経済が日本経済と切り離せないように、日本経済はアジアの経済、世界経済と切り離せません。そういう広い視野で神戸の復興を考えることが重要ですね。

牧 おっしゃるとおりです。われわれが言っていることは、近未来の問題、日本経済が間もなく直面するであろう問題を先取りして言っているつもりなのです。税金を少しまけろとか規制を緩和しろとか、神戸は自分の都合ばかり言っていると言われるのですが、われわれは、それは方向として間違っていますかと聞きたい。間違っ

てはいないと思います。モデルとしてやってみたらいいじゃないか、と言っているのですが、政府はなかなか聞いてくれない。ことに税金の問題になるとものすごく神経質になっています。ここ五年間くらい被災地でのビジネスに対する税金をまけてくれないかと言いますと、全身をびりびりさせたような感じになりますね。法人税の引き下げは、日本の経済界あげて、今のような五〇パーセントもの税率では国際競争が無理だと言っているのですが、ようやく自民党などは耳を傾けてくれるようになってきた。向かうべき方向は分かっていると思うのです。神戸の復興にも役立つのならいっぺんやってみようじゃないか、という発想が出て来てもおかしくない、わたしは思います。

浅井 一部の人は考えているのですが、いまそれを正面きって取り上げる政治家はほとんどいないでしょうね。方向は正しいと思いますが、政治的にも経済的にもタイミングがよくない。住専の問題で、六八五〇億円の税金を使うのならそれを神戸に回せという言い方がもてはやされていますが、住専と神戸の復興は問題が違うのです。一緒にする議論は何も生み出しません。それをだれかがはつきり言わなくてはならないと思います。被災者の感情としては実によく分かるのですが。

牧 それはいわば床屋政談で、わたしはそういう議論にはかわらないようにしていますよ。マスコミが好きな議論でしょうが（笑）。

浅井 震災復興の話に戻りますが、神戸は海と山に挟まれた所に家が密集している。肩を寄せ合ってとも言えるでしょうが、無理で息苦しいという感じもあります。六甲の北側を開発したのがよかったというお話でしたが、もっと六甲の北の方に人が移り住むとか、海側から北側に行く道を整備するという発想は出て来ないのでしょうか。

牧 北の方にも人がたくさん住んでいるところはあるじゃないですか。

浅井 ありますけど、何か北の方は寂しいとか、本当は

六甲の南に住みたいという声を聞きますね。

牧 そうですね。わたしもどちらかというと南側に住みたい方です。

浅井 何なんでしょうかね、それは。

牧 どうも日本人は日当たりのいいところに住みたいという気持ちが強いのでしょうか。北側だって十分日は当たっているのですが。心理的なものがありますね。どう



牧 冬彦さんと浅井信雄さん（ホテルゴーフリッツで）

も経済界にいる人間は、前へ前へという気持ちが強いか静かなベッドタウンよりにぎやかな方がいいのかも知れません。

浅井 一般に、住むところは静かで緑が多く、安全で空間のあるところがいいと思われているのですが、神戸の場合はどういうわけか六甲の南にこだわる…。

牧 ぼくは、昔は年をとったら、静かで人が余りいないところがいいかな、と思っていたときがありました。と

ころがこの年になるといつでも人の顔が見られる所がいいと思うようになりました。いま職住近接だとかまちのにぎわいの中に人が住むのがいいと言われるようになって来ましたが、それが人間の心理だと思っています。若い人は外に出て行きたい。

浅井 アメリカ人もその傾向がありますね。結婚して家を買えるようになると郊外に住むのです。子供が独立してしまふとまた都心に戻ってくる。年を取ると便利な所がよくなるのですね。

牧 いま仮設住宅で問題になっているのは、遠くて不便で寂しいところだということです。が、やっぱり人が住んでいるまちが恋しいのです。

浅井 わたしは人混みから避ける方ですね。物理的にも精神的にも空白がほしいからです。それにしても神戸の人は六甲の南に執着している。大震災で散らばるのかなと思っていたら多くの人は元いたところに帰りたいという。馴れたところは気楽ではあるでしょうが。

牧 これだけはしょうがないですね。わたしもそうだから。

浅井 地震の直後は、これからのまちは防災を第一にして、という発想でしたが、しだいにコミュニティを大事にした温もりのあるまちという考え方が強くなりました。どうも極端から極端に議論が流れ過ぎる。防災もコミュニティの連帯も必要であり、その両立や調和を、どんなに困難でも追求すべきです。いつかまた間違いなく地震はくるのです。

牧 ものが壊れることがないようにすることは無理だと思います。壊れても人間が死なないように工夫することがいいのではないかと考えています。壊れないまちというのは要塞都市になるでしょう。それは無理でしょうね。日本で地震のないところは、探せばどこかにあるのかもしれないが、恐らくそんなところはイノシシと共生するような山奥でしょう（笑い）。

（一月二十日、ホテルゴーフリッツで）



「よくまあ長く続いていますね」

「神戸新生へがんばって」

『神戸っ子』応援団からのエール

六〇年前にもあった

『神戸っ子』

永田良一郎（永田良介商店社長）

昭和三十六年の冬のことでした。

小泉兄妹がお見えになり「戦前にも『神戸っ子』があったらしいが持っていますか」と尋ねられました。探してみると、昭和十年七月から十一月までの五冊が見つかりました。十一月号の編集後記を見ると、一年続いたとあり、昭和九年に創刊されたと推察されます。

このときの『神戸っ子』は、神戸の一業種一店が集まって共同繁栄の実を挙げようということで、青山写真館、ブラジレイロー（大丸前にあった喫茶店）、大丸、カネキ（兵庫トヨタの前身）、神戸旅行社、マル



永田良一郎さん

タマ（現在のキャバレー）、美津濃

運動具店、モロゾフ製菓会社、永田良介商店、松竹座の十社で金を出して発行していたようです。本当の仕掛け人は、当時の大丸神戸店宣伝部長の故塩路義孝さんだと聞かされていますが、昭和十二年の日支事変とともに消え去ってしまいました。

いまの月刊神戸っ子がよくまあ続いているものだとそのがんばりに感心します。今後もあり広告をとりすぎず、本当の神戸案内に徹したタウン誌本来の使命を守ってくださいることをお願いします。ちなみに現在の月刊神戸っ子は、わたしどもの店に創刊以来全冊そろっています。

古きよき時代も忘れずに

嘉納邦子（小磯良平氏次女）

創刊のころは、わたしは結婚して十二年間イギリスへ行っていました。母が送ってくれる小包の中に、必ずのように「神戸っ子」が入っていました。表紙の、父小磯良平が描



嘉納邦子さん

いている絵も楽しみでしたが、なつかしい神戸のお店の様子が分かり、心なごむ思いがしていました。

デリカテッセン、セントラルベーカー、クロス、そしてたくさんの洋服屋さん。娘時代、身の回りの品々をそろえたり、北野に住んでいた父母のお使いでよく行っていたところでした。北野から諏訪山、トアロードをよく歩きました。古きよき神戸でした。『神戸っ子』はそんな神戸の味わいを漂わせた小粋な雑誌で、父も気に入っていたようです。

いま神戸は、新しい神戸へ生まれ変わろうとしています。三十五年前の神戸の、あの落ち着いたたたずまいを忘れずに、新しい神戸を生み出す力になってもらいたいな、と願っています。

新しい生活文化の提案を

松谷彰久 富士勇気（南紅屋代表取締役）

三十五年という年月はいやおうなく神戸の環境を変えてしまいました。個性を誇っていた専門店は、スーパーやデパートなどのゾーンとしての商業施設に押され気味です。三宮センター街は、そうした個店の集まりですが、時代の圧力とともに大震災の打撃を受け、苦しい状況にあります。しかし、犠牲者だといって甘えてばかりはいられないと、一からの出直しを図っています。

『神戸っ子』は、文化の薫りを漂



松谷彰久さん

わせ、粹で洗練された楽しい雑誌ですが、時代の厳しさを認識し、三宮や元町などの新しいイメージを描き、まとめていく役割を果たしてもらいたいと思います。

「ファッション都市神戸」と言いますが、「神戸」というブランドに寄りかかった甘えがあるのではないのでしょうか。世界の情報をいち早く

取り入れ、世界に発信している東京に負けている面があります。大震災のせいにして甘えてはいけません。自立する神戸をめざしましょう。生活文化の提案がきちんとできる神戸、それが本当の「ファッション都市神戸」だろうと思います。これからの『神戸っ子』に、そうした内容が盛り込まれることを期待しています。

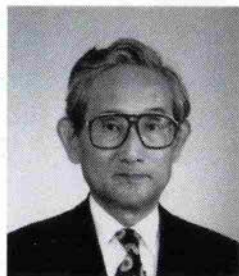
理想に燃えていたあのころ

芹澤豊男 ㊦ティックセリザワ社長

『神戸っ子』が地域の情報誌として誕生以来、風雪に耐えて三十五年。その間の並々ならぬご努力に対して、心よりの拍手を贈ります。

創刊の年、昭和三十六年ごろの私は、大丸前商店と三宮センター街店の三店舗をトリオショップと名付けて、ファッションを通して女性の夢と文化を創造する理想に燃えていました。そんなある日、若い小泉さんご兄妹から『月刊神戸っ子』創刊の熱っぽいご相談を受けたことを昨日のように思い出しています。

長いお付き合いの中で、ミコちゃん編集長の功績を忘れることは出来ません。感性豊かで、人なつこい性格。頼まれると不思議にイヤと言えない魅力の持ち主。それに世話好き…。震災で家が潰れ、事務所も大きな被害に会われた直後の二月一日、



芹澤豊男さん

早くも号外をだされ、被災の心に灯をともしてくれたあの情熱には頭の下がる思いです。

よみがえれ美しい神戸！がんばれ月刊神戸っ子！

『元町』から始まった『神戸っ子』

佐藤 廉 ㊦元町画報

三十五周年を迎えた『神戸っ子』に心から御礼と、喝采を送ります。顧みますに、『元町』と言う薄べらな、一街区の広告誌よりスタートしましたが、現在は日本一のタウン誌として羽ばたいている老舗タウン誌であります。

その活動は単に一街区より脱し、神戸市全体に、県内に及んでおります。その都市の持つ特徴をいち早くキャッチし、文化・ファッション・経済はもちろん、その時代に即した社会的問題までも私たちに伝達してくれました。

今、三十五周年を迎え、その活動は、昨年の阪神大震災においてタウ



佐藤 廉さん

ン誌の使命を最大限に発揮し、公的な発言のみならず、ボランティアの役目を立派に果たしたのであります。これも一重に本誌の社長・編集長の培った経験があればこそ、充実した今日の『神戸っ子』に育ったのだと存じます。

本当におめでたいことだと、私たち神戸っ子は、大いに誇りを持って、心からのお祝いと、お喜びを申し上げる次第であります。

神戸の山と海の薫りを 神 晴夫

ヘトムキャンティ社長

バー・トムキャンティは、今年で創業三十三周年になります。『神戸っ子』同様、人々の愛情に支えられてきたということでは共通しています。発行日は守らないし、おまけに広告ばかり集めている。こんな雑誌がよくここまでこれたもんだ。でもそこが、かわいいというか、神戸っ子の寛容さだろう。

でも『神戸っ子』が提言してきた

「ファッション都市神戸」「グルメ都市神戸」というロケーションづくりに、多くの企業が賛同していった。三十五年前の神戸には、ドレスアップをして遊びに行く所すら少なかったのだから、神戸っ子が楽しめるまちに不可欠なものは何なのか、それに今もなお、真剣に取り組んでいるのが分かります。

現代は、新しいものももてはやされる時代だが、新しさだけを求める



神晴夫さん

のではなく、神戸の歴史、ストーリーを伝えるタウン誌であってほしい。神戸の土壌と密着した、ページをめくると、山と海が薫るような。

原点を忘れずに

中西 勝 (画家)

「体育の日」があるのだからと、『図画の日』を提唱している。

こどもが感激にまかせて描いた絵や便所の落書き。がさつだが、したいことや思ったことを描かざるを得なかった絵だ。感激がなくても丁寧



中西 勝さん

に写せば、これらの絵より「上手い」と評価される。

「WE LOVE KOBE」。震災直後、まちで見かけるたびにぐつと来た言葉だ。頼もしく、しかも謙虚に感じられる人間たち。

上滑りであってはならない。しかも見当違いではあってはならない。気力や体力など難しい条件はあるだろう。しかし、もうちょっとやってみようと思う。これは、私が絵を描くときに大切にしている気持ちだ。

『神戸っ子』とのつきあいは、その前身『こうべ元町』が同人誌のように創刊されて以来だ。

下手だと思われている絵や震災直後の神戸。原点を忘れずに。そんな思いも込めて『図画の日』を提唱している。

歩きながら

下村俊子 (神戸風月堂代表取締役社長)

「小学生、に戻った気分やね！」

「ほんと、ほんと。お互いの年齢から五十歳を引きましょか」



下村優子さん

「焼け跡を駆けまわったことを思い出すわ。五十年経て、また同じ感慨やねえ」

「まったく。あの時は、こどもだったけれど、焼ける前の街並に記憶がありましたでしょ」

「そう、それで目印となる建物がなくなっても、道順もわかっていたし、ね。今回も、よ」

震災後四、五日目。小泉美喜子編集長と、元町通りで出会ったときの会話です。

「震災特集号、出すことにしたわ。来年、三十五年よ。一号足りとも休刊するわけには！」

「おみごと！元氣の出る文章、お願いします」

「お互い、神戸で生きているしねえ。やりましょう！」

「五十年、百年の後も読者に、神戸を伝えつづけてくださいませ」

新しい神戸を創る役割を

田崎俊作（田崎真珠社長）

三十五年間、よく続いたな、と感

心しています。これからは、この変化の早い時代にどう対応していくか、難しくなるでしょうが、さらに知恵をしぼって、日本の代表的なタウン誌として発展されるよう願っています。

いま、私たちは歴史上例のない時代を迎えているのですが、時代に安住するとマンネリになり、怠慢から甘えが出て来ます。政治も経済も、甘えに毒されている面が見られ、危機感を覚えます。文化の面も若者を中心に、映像の時代ですが、こうし



田崎俊作さん

た流れに乗って流れてしまわず、私のような戦中、戦後派の人間もときには大事にしてももらいたいと思っています。

神戸も、目の前の復興も大切ですが、時代の流れをより大きな目で見て、新しい神戸を生み出すように努めたいものです。そのために「神戸っ子」もがんばってください。

「文化の彩りが心のオアシスになる」

西 正興 ユーハイムコンファクト代表

私が三菱重工神戸造船所の艦艇設計課に就職して神戸にやって来てから三年後、子供のいない叔父の経営するユーハイム・コンファクトにトラバユしたその頃、「神戸っ子」も産声をあげました。それから35年間お互い神戸のためにがんばってきました。

昭和47年神戸青年会議所理事長当時、「文化する心」を神戸市民の皆さんに訴えたのだが、「神戸っ子」も表紙や中味に多くの画家の手になるものや、数多くの文化的色彩豊かな紙面で構成されており、誠にうれしい。忙しい時でもバラバラとめくるだけでも心のオアシスになる。

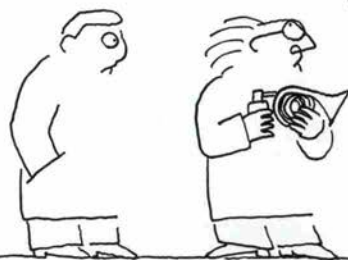
また、神戸を愛する人々による座談会が多くとりあげられ、特に昨年の大震災後の「元氣を出す」企画や記事が率先して掲載され、神戸市民の励みとなっています。



西 正興さん



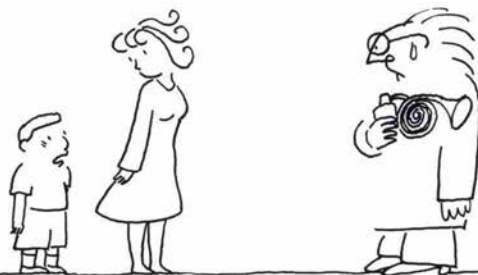
もとの形にもどす……



4



5



6

■大手前女子大学復興対談

甦えるニューキャンパス

地域に開かれた大学作りを

〈出席者〉

伊藤 正視 (伊藤ハム(株)専務取締役)

遠松 展弘 (株)日建設計設計部長

菊地 由絃 (ヘアースパートナードシップ(株)代表取締役)

鈴木 亨 (大手前女子大学 文学部長)

福井 有 (大手前女子学園 法人为本部長)

司会

河内 厚郎 (評論家)



鈴木 亨さん



河内 厚郎さん



伊藤 正さん



福井 有さん



菊地 由絃さん



遠松 展弘さん

大手前女子大学は阪神・淡路大震災により、最も大きな被害を受けた大学の一つだが、昨年五月にいち早く夙川復活祭などの地域に根差した活動に立ち上がり元気な大手前をアピール。校舎も、昨年8月より工事を開始している。

そこで、新しい建築計画について関係者の方々に集まって頂き「地域に開かれた大学作り」をテーマに、阪神間に育てる個性的な大学のあり方を語ってもらった。

河内 大震災以降、大手前女子大学は被害の規模からいっても、トップクラスであるにもかかわらず、キャンパスからも地域からも、なかなか元氣だ、という印象を受けます。

鈴木 実は大手前女子大学は本年が30周年。その直前にこういうことになりまして、文学部だけの単科大学で、全部で4学科ですが、今春から待望の大学院もスタートします。昨年の8月に新校舎の建設がスタートしました。河内 いよいよ新校舎が完成ですが、どういった感じですか。遠松 まず私たちは震災直後の2月に入りまして、大学をいかに正常な状態に戻すか、時間との勝負が一つのテーマだと考えました。来春にはちゃんとした建物で新入生を迎え入れたい。そのためには、どうしたらよいか、ということと大学と話し合ってきました。幸い、私個人は二〇数年間このへん(阪神間)に住んでおりまして、このへんの地域に詳しいもんですから、ある意味での大手前女子大の魅力というのは個人的にわかっていたよう

に、思います。具体的には、このプランでいうと、建物的には本館は以前のものの約1.5倍。せっかく作るんですから、震災前に戻すのではなく、震災前より、いいものを作る、という考え方が大事だ、と思います。

学校そのものとしては、学生が見学に来て、この学校に入ろうかどうか、ということ考えた時に、学校がどういうホスピタリティをもつて、迎え入れるか、という細かな配慮をしていきたい。あと、地域と共存するというか、地域に開かれた大学のあり方というのも、考えていきたいですね。

鈴木 確かに、きつちりと区切って、ここが大学です、というようなものではないなあ、という感じがしております。実際、近所の人が買い物にいくのに、キャンパスを通り抜けていくくらいだから。あくまでも、地域のみなさんに親しんでもらう大学、という気がいたします。今回、はからずも被災しまして、教室面積の50%を失い、どうしても新築しなければいけないのですが、将来の大学像を見据えた上で第1期工事、2期とすすめていきたい。

福井 それで、コンセプトを考える上で「エデュテイメント」という言葉に着目しました。これはUCLAの教授がテマパークのコンセプトとして、つくった造語なんです。『清潔な環境』『知的な雰囲気』『ノスタルジーをかきたてる情感』『やすらぎの空間』『ストーリー性』の他に、私どもの場合は、女子大らしい色彩感覚もプラスし、全てを考慮にいれながら、設計をお願いしました。

まあ、その具現化としては、まず第1に、トイレをきれいにする、ということ。やはり、清潔感という点では大事です。等身大の鏡をおく、とか……『知的な雰囲気』というのは、やはり図書館を充実させたいですね。『ノスタルジーをかきたてる情感』私の中学では、下校時間に「ユーモレスク」が流れてたんですね。学校へ来て、学校から帰るといって中に入った思い出になるような要素をいれたい。例えば鳥の声であるとか……『色彩感覚』としては、パステル調。『やすらぎの空間』としてはキャ

ンパスに緑が多いので、そういったものを中心にしていきたいですね。大きく3つ、建物の特徴をあげますと、1つは、「学生を中心とした環境造り」。2つは、「情報のシステム化」。3つめは「地域に開かれた大学」。この3つを大事に考えていくつもりです。

鈴木 女子大の学生というのは、共学の学生に比べて、出席率が非常にいいんですね。男子学生に比較すると。ところが、サークル、クラブの加入率が低い。では、何をしてるんだ、というところ、学校へしゃべりにきてるんだと。お茶を飲みつつ、コミニケーションをはかっているんだと。(笑)ですから、そういうコミニケーションをはかる機会を作っておけるのが、「学生を中心とした環境造り」には大事な点かなあ、という風に思います。

福井 2つ目は、情報戦略です。学生への情報サービスを充実させる。学校内で起こっていることを、学生にCATVやパソコンなどで、知らせるシステムを確立する。第3に、「地域に開かれた大学」ということですが、校内にアートセンターが、ございまして、幸い地震でも無事残りましたんで、今までコンサートなどコミニテイイベントを行ってきたのを、もつと開放して充実させたいですね。今度、黒沢明監督のコンテの展覧会を50周年の記念イベントとして企画しています。ファッションショーですとか、いずれは卒業生がここで結婚式をあげられるなど、大学というコンセプトを少し広げて、地域に役立つ存在になりたいなど。この3つを考えています。

河内 夙川は戦前からの高級住宅街ですから、みなさんよいイメージは持ってるんですが、具体的にどんな文化施設があり、どんな遊び場所があるかというのは、知る人ぞ知るといって感じ。北野も住宅地であり、観光地でもあるという点で、いかにして、付加価値と、ステイタスと、賑わいを共存させるか、ということに、いろいろ苦労があったと思うんですが……

菊地 北野は20年前から、神戸市が力を入れてますので、いろんな開発をしてくれています。ハードの面では整って

おり、その点のアメニティに関しては、できあがっていると思いますが、北野の場合は、もともと商用地ではありませんでしたので、住宅地だった所に商業が入りこんできたという形です。この大手前あたりと、北野が非常に似通っているのは、住宅地の中に発生している、ということ、我々が求めていくのは「小ぶりの商標」というんでしょか。

今、北野の発展のためにテナント誘致ではなく、「人」誘致を行っています。子供の頃、元町やセンター街に父が買い物に行くのに、ついていった時、物を買っていくというより、店主と話をしにく、という風景を見てまして、こういうのは、いい気分が安らぐんですね。そういう風景が北野で見れたらな、と。といいますのは、大規模な商売文化では、売り手と買い手のコミュニケーションというものが特に生まれてきていないものですから。

大手前も、じっくりと時間をかけて良いものを作る、という気持ちでこのプロジェクトに取り組んで頂きたいです。一つには「アメニティの創出」です。キャンパスにおしゃれな看板をおく、とか時を告げる鐘、噴水など。

小島が集まっている風景、夜間には建物を照明でライトアップするなどして、とにかく24時間PRしていくことが大事ですね。その次に「ホスピタリティあふれる学園作り」というのがあります。さきほどの物理的なアメニティではなく、精神的なアメニティ。いかに、外部の人を暖かく迎えるか、ということを経験だけでなく学生も含めて、考えていくというのが大事なことです。

3つ目は「個性ある学園作り」。これは時代の流れで、どこへいっても、同じような教育内容に、同じような仕組みとなっており、いわば、偏差値教育の弊害だとは思いますが。就職や結婚のための道具としての大学で、教師と生徒の関係も薄れているようですね。学園というのは日常生活の一番大きなものであるということ、そういう気持ちに学生がなれるような関係。よそいきの関係でなく普段着の関係を作っていた方がいいですね。

4つめに「地域と共生する」ことによって、共感を得ること。催し物だけでなく、例えば地域で何ができるかというテーマでシンポジウムを開催する、など学生も含めた誰もが自由に討論できる場所を提供する。また、遊びの部分ではフリーマーケット、写真展など。2番目のアイデアとしては何か校内で地域住民に開放できる施設はないか、と。例えば入り口付近にカフェテラスを作るとか、本屋さん、文房具店、カフェなども利用してもらえようというですね。常設ギャラリーで定期的に何かを行っていくというような、学生が大学に来て毎日楽しいと思えるような大学にしたい。

伊藤 神戸の街の今後のキーワードとしては、「エンターテイメント都市・神戸」。これは、神戸市の提唱しているKIMEC構想の基本でもあるわけですが、それには大変共感いたします。やはりサービス産業はますます、これから発展していくであろう、そういった中で、大学経営も、均一性よりも、いかに個性を出していくかが、問われるわけです。そこで、地域に密着するという事は個性の基本なんですよ。おおむね、成功した観光地や施設は、地域に密着という要素がありました。その地域にはストーリー、歴史があり、非常に大事にしている。これは、北野町もそうでしょうし、ハワイもそうでしょう。

『情報化社会』といっても、むしろ、私には、情感を発信していくという方が可能性があると思います。私たち食品会社で非常に大事な位置を占めるファーストフードのヒットメニューは、アメリカでは大学のキャンパスで、受け入れられるかどうか、市場調査よりも遙かに確証性があると言われています。そういった学生の感性から学びとっていく、というのは我々にとって、大切な作業なのです。新しいメニューやファッションのモニターとして、学生は大切な存在かもしれません。そこで、情報発信というのが大手前にも期待されるわけです。

河内 夙川の地域性というのは、かなり恵まれているんですが、大手前のレベルが上がっていくことでこの周りもさらに上がっていくという。



大学の未来像を語り合う

福井 大手前の学生もサマースクールで、アメリカやヨーロッパに連れていくと、「夙川が懐かしい」「桜並木が懐かしい」と必ず言ってくれるんです。そういうものを、ストーリーとして捉え、夙川の歴史を守りながら継承し発信していくということが、史学科もあることで、大切なことだと思いますね。

遠松 この夙川というのは、阪神間のよさを、ギョッと凝縮していると思うんです。道路が車のための道でなく、

人間のための道なのです。思索にふけるのに、いい道なのです。シンボジウムやフォーラムに適した環境であるといえます。21世紀にむけて、人々は心の悩みや、不安を抱える時期だと思うので、その中で思索にふけるというのは、非常に大事なことであり、そういった環境を提供できるという、他の大学と違った、人のサイズで歩ける大学なのです。

伊藤 イマジネーションをかきたてることは、大事な要素ですね。あと、好奇心。そして、コミュニケーション。やはり興味、関心を無理やりでなく、引き出してやる。エデュケーションは引き出すという事ですから。押し込むのではなく、好奇心をかきたて、イマジネーションを育て、コミュニケーションを引き出す。もう一つは本で見かけたんですが、地域の持つキャラクターというのは、それぞれ違いがあって、それは、その音とか匂いなどが作り出しているものだと思います。

個性的な地域というのは、もともとそこに自然発生的に湧いてきたものであり、スケールも機能も街に密着しているのです。従って、その地域の特質は、そこに住む人たちのパーソナリティに大変わって来るといえます。この夙川は日本の住宅地としてはすばらしいところですから、見つめ直していったら、いかがでしょうか。つまり、大手前らしさ、です。

河内 夙川というかえがえのない地域性を生かして大学づくりをすすめていくということが原点だといえそうですね。本日はどうもありがとうございました。

■大手前女子大学

西宮市御茶家所町6-42 〒666-2

TEL 0798・34・6331